三中・山城　オリンピック選手

長谷川敬三物語

（日本陸連年鑑から）

長谷川敬三　物語

輝きの先輩、長谷川敬三

記者席からピットに目をやる、静かで、それでいて鋭いあの眼差し、今も思い出す。朝日新聞大阪本社の陸上記者だった長谷川敬三さんだ。東京五輪の年、京都新聞に入社して、２年後に運動部配属、希望していた陸上担当になった時、長谷川さんは既に記者の大御所だった。同じ陸上競技の大会を同じ記者席から見て、翌日の朝日新聞に掲載の長谷川評は、憧れだった。競技の見方が違う、文章力が違う～と何時も記事を切り抜いて、目標にしていた。それが、三中・山城高校の先輩で、オリンピック選手の長谷川さんだった。今年、三中・山城陸上部１００年、その輝きの象徴は長谷川さんでしかない。記念史編集に当たって、長谷川さんが京都陸協35年史に投稿した原稿、山城雄飛録に載った長谷川さんの同級生だった内藤薫男さんの原稿を再録して、長谷川業績を振り返る。

幻の金メダル

三中31回卒　**内藤　薫男**

1948年ロンドンオリンピック、第二次世界大戦直後に開催されたこの大会には、日・独・伊の枢軸参ヶ国は参加を許されなかった。もし日本が参加して居れば当然金メダルに輝いたであろう選手が居た。恐らく皆さんは「フジヤマのトビウオ」古橋広之進選手のことと思い出されると思う。彼の活躍は敗戦にうち拉がれた国民を如何に力づけた事か。しかし彼は金メダルを手にする事はなかった。

水泳日本の華やかさの蔭にかくれてあまり話題にも上らなかったが、彼と同じ運命を辿った名選手がもう一人いた。その名選手こそ我らの同窓の長谷川敬三君である。ロンドンオリンピックの三段跳び決勝と日を同じくして行われた日本選手権陸上競技大会において、彼はオリンピックの優勝記録を上回る記録を出していたのだ。オリンピックの優勝記録は15.44メートル、彼の記録は15.62メートル、戦後世界最高記録だった。当然金メダルに相当する大記録であり、織田幹雄、南部忠平、田島直人の三選手につづき、三段跳の四連覇が達成されていた筈だった。

長谷川敬三君が小学校のとき、朝日新聞社が選んだ学力・体力とも優秀な日本一の健康優良児に指名されたことはご存知のことと思う。京三中入学以来陸上競技部に籍を置き、陸上競技に理解の深い国府田先生や、短距離の名ランナー岩崎重雄先輩（三中第28回卒、名古屋高等商業から慶応大学に進み、100メートルの日本選手権優勝者）らに恵まれ、順調に記録を伸ばし、彼の行くところ敵なしの感があった。彼の脳裡には輝かしい跳躍日本の三段跳の伝統を継ぐのは自分しかいない、オリンピックの大競技場のメインポールに翻る日章旗を夢に描いていたと思われる。

しかし彼の行く手は決して順調ではなかった。狭い運動場は野球部やラグビー部に占領されて居り、練習も隣の臨済学院（現花園大学）の運動場を借りる有様だった。その上、三年生の時、校内運動会の走幅跳では6メートル50、当時の中学生としては驚異的な記録を出したものの、踵を骨折するという大ハプニングに見舞われてしまう。運動場中央に設

けられた臨時の砂場は、彼にとっては小さすぎ、砂場の向かい側の縁に着地してしまったからだった。彼の不運はさらに続く。拡大するばかりの日中戦争は、昭和15年、皇紀二千六百年記念として開催が予定されていた東京オリンピックを、非常時を理由に返上に追いやってしまった。これはもう一人の同志の水泳長距離の名選手でオリンピック候補にあげられていた阿座上新吾君の夢をも奪ってしまった。東京オリンピックに照準を合わせて練習を積んでいた彼の無念さは砂防協会編の阿座上新吾君追悼文集の中に切々と述べられている。

踵の傷も完治し、彼の活躍は復活するが、彼を取り巻く環境は悪化するばかりで、記録も予想された程伸びない。三中を卒業すると彼は憧れの早稲田大学に進学する。しかし早稲田時代の彼は一つの壁にぶつかっていたのでは無いだろうか。当時の第一流の目安である15メートルは超えられなかった。

戦時中の彼の消息は知らない。しかしやがて朝日新聞スポーツ欄に彼の健筆がふるわれることになる。それと共に競技生活も復活する。オリンピックも再開されたが、日本の出場はゆるされていない。彼は無念と悔しさを日本陸上選手権大会の三段跳にぶっつけた。そして遂にやった。オリンピックの優勝記録を破ったのだ。しかし金メダルは幻でしかない。彼の瞼には遙かにロンドンの空に翻る日章旗が浮かんで居たことだろう。「食糧不足の中にあっても、通勤途中の満員電車の中で爪先立ちや屈伸運動でトレーニングを怠らなかった。」と記されていた新聞記事を思い出す。次のヘルシンキ大会（1952年）では既に彼の全盛時代は終わっていた。代表選手には選ばれたものの予選通過すらできなかった。

新聞記者も終え、競技生活から引退してからも、彼は京都大学農学部運動場に通い続け、京都大学の陸上競技部コーチとして、次代の競技者育成に携わった。1999年5月6日、陸上競技一筋に捧げた生涯を締めくくった。

（「京三中・山城高同窓会創立百周年記念文集」より引用）

塚本式ガンバリズムで世界最高

長谷川　敬三

小学校のころから"跳ぶ虫"　だった私は、中学（現山城高）に入っても、ただ黙々と跳び続けた。雨の日も、足を痛めることなど少しも考えず、一日でも練習を休めば折角積み上げたものが一度に流れ去るような錯覚に陥り、学校の石廊下を走った。冬は冬で、ラグビー部のじゃまなのもかまわずに円盤を投げ飛ばし、スパイクが無いと寝られ

ないような日々だった。

昭和15年、早大に進んだが、さすがは"陸上王国"全国中等学校大会(今の全国高校大会）に優勝していても新人はどこまでも新人、毎日練習が始まるまで、砂場を掘り起こすのが日課になっていた。こうして第一歩からたたき直されているうちに、第二次世界大戦となって、運命は死ぬ程嫌いな軍隊へ私を連れ去った。幸い復員して「灰色の青春を取り返すのは、これからだ」と、しまっておいたスパイクにほおずりした。大阪の朝日新聞社に通う日々、折があればどこでも練習ができるようにバッグを手離さなかった。23年8月大戦後初めてのオリンピック・ロンドン大会（日本は参加を許されず）のあと、山形で日本選手権が開かれ、東海道、東北本線とデッキで握り飯をかじりながらで出かけた。試合の前夜は生憎の雨。これではと、能勢賢一君らと敷布をまとい、バケツをたたいて仮装大会をやったことなどなつかしい。ところが一夜明けるとカンカン照り。アップをしていると親友の鈴木君（早大）が走高跳で1m93を超え優勝。女子走幅跳びでも山内リエさん（京AC）が４連勝したというアナウンスが聞こえる。とたんに「オレも」と闘志が湧き、競技場や会合で今は亡き塚本簫之助氏と話しをしているうちに伝染した「何くそがんばれ」流儀が、この闘志に火をつけた。15m62、ロンドンオリンピックの優勝記録をもしのぎ世界最高だ。青春はこの一瞬パッと燃えた。だが言葉をかえれば、それは〝何くそ〟の結晶であったと思う

ところが４年後のヘルシンキ大会では、この〝何くそ〟がすっかり影をひそめていた。選手村での練習中に捻挫して、無気力のまま敗退した。もしこの時に塚本式ガンバリズムが生きていたらと、今でも悔やまれてならない。先輩の〝がんばり〟を忘れた罪は大きい。全く恥ずかしい次第である。

だが、三色の京都ACのマークを胸にとび続けたころは、オリンピック代表になった時よりも印象に残っている。このころこそ私の青春であったかも知れない。

（「京都陸協創立35年史」から転載）

人生とは不思議なもので、時を経て、長谷川先輩と一緒に仕事をしたことがある。今や都大路をときめかす新春恒例の全国都道府県女子駅伝が始まった頃、長谷川さんが朝日新聞を定年退職して、京都新聞編集委員としやってきたのだ。運動部、社会部、滋賀本社の記者時代からデスクに入っていて、長谷川さんに海外スポーツ情報、専門の陸上では京都新聞主催の女子駅伝を大所高所から取材してもらった。デスクだったので、恐れ多くも原稿を点検させてもらう立場だったが、どの記事も陸上競技に対する思いの深さを感じさすものばかりだった。昭和２３年、第３２回日本陸上選手権三段跳び優勝、長谷川敬三（京都ＡＣ）１５㍍６２の記録は、その前年、日本が参加できなかったロンドン五輪の記録を２２㌢超えていた。今更ながら、その記録の偉大さを思う。

（岸野）